

肝細胞癌副腎転移に対して CT ガイド下ラジオ波焼灼術(RFA)を施行した 1 例

熊本大学大学院 消化器外科学

丸野正敬、新田英利、野元大地、秋山貴彦、高城克暢、 東孝暁
橋本大輔、近本亮、石河隆敏、別府透、馬場秀夫

【はじめに】

今回、肝細胞癌右副腎転移に対し経皮的ラジオ波凝固療法(RFA)を施行し、著効した症例を経験したので文献的考察を加え報告する。

【症例】

74 歳男性。1995 年に慢性 C 型肝炎、肝細胞癌を認め肝動脈化学塞栓療法(TACE)を行った。その後の再発に対し 1997 年に肝拡大左葉切除を施行し、その後も肝内再発に対して RFA を繰り返していた。2013 年 12 月に右副腎単独の転移を認め、CT ガイド下 RFA を施行。特に大きな合併症なく終了し、術後 11 か月の無再発を得ている。

【考察】

肝細胞癌の遠隔転移巣に対する外科切除は、肝機能や全身状態が悪い患者に対しては侵襲が大き過ぎる場合がある。比較的低侵襲で局所麻酔下に施行可能な RFA は、遠隔転移巣に対する治療の選択肢となりうる。